△第三等▽

姑ごゝろ

岡田美知代

一

『だらいつその事恁樣して見さつしやれ。』

と坂下の槇藏爺さん、圍爐裏に榾柮を添へながら、天晴れ名案と云つた樣子に、相手の顏を見入つて、

『のうお捨さ、いつその事離緣ばなし打つたら奈何ぢやろ。』

『エ。』

と見上げたお捨の眼には早や涙である。襦袢の襟に頤を埋むるまでにうつむいて、右手を懷ろに、悄として言葉も無い。頰の邊りげつそりとこけて、皺のみ多い額の何處やらにきかぬ氣のほの見えぬではないが、ついぞ油と云ふもの付けた事もなければ、白髮は徒らにそゝげ返つて居る。

『俺いアすき好んで恁樣な事、口い出し度かあ無いが、種々將來のことべい考へると、俺如何にも其方好え思ふで、お前惡うとつて呉れなさるなよ。』

『何の何の勿體無い、お前樣にや良人が亡くならしやれてからと云ふもの、引續いていかいお世話に成つてばかり、お陰で妾も此年迄寡婦を通して、心ぢやいつも拜むのでがんす……したが槇藏さん、妾矢張り隱居して別に烟を立てやんせう思ふてのう。』

しみ〴〵うるんだ聲で云つて、深く思ひ込んだ樣。

『お前樣の云はしやる通り、これが家付きの娘と云ふぢや無し、いつそ親權で離緣したらと思はぬでもないけれど、それじや如何にも孫が可哀相で……知つての通り倅は御國の御用で戰死するし、今嫁を去つて丁やあそれこそ全くのみなし兒、此上の不仕合せが有らうかい。』

『まこと、聞いて見りやそれも理ぢや。』と、ポンと煙管を叩いて思案顏。

『それじやと云うて、此儘默つちや暮し兼ねる譯も有つてノシ、尤も是りやお前樣と二人限りの中の話として、妾はア困るのでやんすよ。』

『さう云やあ、新田の吉奴が折々來るちうでねえか。』

お捨はハツとしたが氣を換へて、

『だらもう世間じや那樣な諷評でもがんすがのう。』

『いんにや左樣でも無いしたが、秋野さもあつたら寡婦にや惜しい年だで、お前の心配は中々のこつちやなからう。』

『……それも相手が相手なら……と云つて確かな手證が上つた譯じやなし、お互にさうでもない仲をとやかく歌はれて、例令一時でも口惜しい思ひをした覺が有つて見りや、やたら疑ふでもないけれど、意見したちて聞くじや無し、此儘置いた日にや吉奴が口へ乘つて、家も山も飛んで了はうぞ、それ考へるだと妾、御先祖樣に濟みましねえ、今の內早う財產の七分方隱居料として、妾が所得に持ち出したら思ふのでやんす。』

『尤もじや！』

槇藏爺さんはしん〳〵とうなづいたが、

『したがのうお捨さ、嫁御を先きえ、何も知らぬ世間じや嘸お前をそしる事じやろ、俺いア情け無い。』

『ホ、、今更詮も無い、第一倅に先立たれたが妾の不仕合じやもの……其內にや孫も成人すりや、夢も覺めうぞ。』

われと慰めるゝやうに、お捨の聲は底錆を帶びた。

今年や豐年穗に穗がさいて……

突然、彼方の野良で誰やら好い聲で歌ふので。

『ほんに他所は陽氣じや。』

二

村端れの龍王神社、神代からとも思はるゝ大木が眞黑に繁つて、それが折々風を相手に何やら小聲に囁く外、音も無い。

『エラ遲なはつてお待遠。』

なつかしげな女の聲。カサコソと落葉をふんで、小さな二間四面ほどの疎末な本殿の、朽ちかゝつた狐格子のまへに立つたのは秋野で、其傍に腰かけて、やけに濃い煙草の煙を環に吹いて居るのは、新田の吉と云つて、もと流れ渡りの馬喰である。

ちよいと小意氣な、斯うした山家には珍らしい樣子の、眼のはしこい、鼻筋のよく通つた、男らしい面相の男で、赤糸入りの双子織の袷も似つかはしい。一寸肩を搖つて、椽のかまちに煙管を叩いたが、ジロリ秋野を見やつていま〳〵しさうに、

『ヘン、お待遠も無えもんだ、人をツケ馬鹿にしてやがら。』

『アレまあ堪忍！　濟みましねえ。』拜むやうな調子。

『なに云つて見た計りさ、お前は正直だから可愛い、お前の顏さへ見りや俺もう文句があ無えんだ。』

『甘く云うてじや。』

とは云ふものゝ秋野はうれしさに、邪氣なく顏を染めるのであつた。

『いや全く、八釜しやの姑の手前も有らうてんだもの、お前も隨分出難くかつたらう。時に此間の一件は？』

秋野は急に返答をし得なかつたが、

『實はのうお前樣……。』と漸く聞えるか聞えぬ程の小聲で云つた。

『うむ！　不可ないと云ふのか。』

吉の眼は不足らしう輝いた。

『否、やつと造へるにや造へたでやんすけど……吉さ、お前樣本間にたしかな當があつてのかい。』とおど〳〵男の顏を見る。

『何故？　大丈夫、外れッこは無え、それよりかお前、確かに持つて來たんだらうねえ、俺あ大丈夫だ、さあ——。』

『本間にお前樣。』としんみり云つて、

『妾良人に濟みましねえ、全く並大抵のこッちや無いんじやけに、吉さやたら消費つちや呉れなさるなよ。』

『おい、よして呉んねえ、大丈夫だつてえばよ、なあ、そんな詰らないことを云ふもんじや無え、俺あ將來を思へばこそだ、可いか、解つたか、今度の久井の牛市でさ、お前が約束の彼金を出してさへ呉れりや、俺のを外に五十ばかりも足して、例のを買つて連れ出さうものなら、倍どころか、六百や七百つかむに譯やあない、左樣なつた日にやお前、何時まで姑に白眼まれて、詰らない心配をしやうより、何處か二人で高飛びしやうと自由じや無えか。』

『ホ、、まさか那樣な甘い譯にや行くまいでのう。』

『ヘン馬鹿云つてらあ、此處いらで働いてるケチな

田曳き鳥たあ、憚りながら些つと譯が異ふんだ、奈奈津賀原の牧場で育つたシンメンタールの三回雜種でさ、前脚の具合から後脚と云ひ、第一其野面の好いことッたら無えや、と云つて聞かした處で駄目だ、お前等に解りッこは無え。』

『アレまあ解りやんすよ、去年の春村長樣が奈々津賀のじやて、エラ立派なのを連れて來なされたで、妾知つとりますだあ。』

『違ふッてこと！　ありやアシャだ、此方のあお前立派な乳牛でさ、乳なんか宛然大きな茶袋ん中へ、ずつしり米を詰め込んでぶらさげたと云ふ形、そりや最早實にすばらしいもんさ。』

秋野は只モウ一心に聞いて居たが、やがて更紗の帶の間を探ぐつて、紙に包んだのを大切そうに取り出して渡すと、吉は澄して受取つて、五圓札ばかり一枚一枚、丁寧に數へて丁度四十枚の二百圓、再びもとの紙に包んで懷の財布へ入れた。

三

新穗の香の交つた、心地好い空氣に清らかな餘韻のある寺の鐘が、おだやかに和らかく村中を響き渡ると、一面黃金色に浪打つた野良も、薄く濃くとりどりの色美くしう彩どつた山も森も、うつすりと黃昏れて、彼處の谷間、此處の丘と、木の間がくれにほの見える草家の屋根から、夕餉を炊しぐ紫色の煙がゆるう立ち上つて居る。

と見ると田のふちを流れて、帶のやうな溝川の中に這入つて、しきりと水いぢりをして居る子供がある、まだ年も幼い精々五つでもあらうか、顏の色青白めて、脣の色さへも黑う變へて居りながら、手織り木綿の綿入の裾をとつて、後ろの帶ぎは高うからげて、此夕暮のうそ寒さも感じぬ樣子。

『其處に居るなあ作坊でねえか。』

皺枯聲に呼びながらお捨は畦道を傳ふて來たが、

作は一寸と振り返へつたばかり、言葉も無い。

『アレまあ此の兒、何ちふことじやろ此寒いに、風引くでねえか、さあ〳〵上らしやれ。』

驚ろいて無理矢理水から引き上げると、何と思つたか、作は其儘ばた〳〵と駈け出すので、

『これのう待つた。』

漸く追ひすがつて、いとしげに、

『のう作坊、お前まあ何故斯う祖母が呼ぶに逃げるぞい、久し振りに隱居へ御座れ、お前の好きなあんも燒いて食はせう。』

『いや〳〵厭なことじや、祖母やは恐い鬼婆ぢやげに、若し呼ばれても行くでねえ云つて、母やが叱るもの。』

『何じやとい！』

とばかりの聲はふるへて身悶えた。あゝ其胸中には幾何の悲憤が籠つて居らう。

【完】